

◎中浜小学校2階空き教室の「歴史資料展示」を

高知新聞から取材を受ける！

本年秋より休校中の中浜小学校「2階空き教室」に展示中の民具や埋蔵文化財などの展示を行っている。旧松尾小学校に保管していた文化財を昨年秋から少しずつ移動してきた。市立小中学校校長会や県立清水高等学校にも周知し、授業などに実物教材として利活用を呼びかけた。また、小型の民具や埋蔵文化財については授業に長期間貸し出すことも可能であることを知らせ、土佐清水市ホームページの各課一覧「生涯学習課」をクリックいただければ民具貸出カタログと借用申請様式がダウンロードできるようになっている。

このことについて、今月4日午後に高知新聞の取材を受けた。取材には清水支局長・山崎彩加記者が展示までの経緯や展示内容などについて取材し、生涯学習課市史編さん室職員がそれに応えた。

2階スペースは、部屋ごとに(1)農具・林業道具、(2)生活用具・漁具・真念庵関係、(3)武具・埋蔵文化財・切手、(4)旧大津小学校史資料に分けて展示している。まだ、具体的な見学の実施はないが、老人クラブや小学校から問い合わせの連絡があり、年明けには見学なり、借用の申請が提出される見込みである。



…価値ある社会科教材民具 ～民具を学習する意義～…

「民具」はその存在自体が、近世から近代、そして現代へと技術進歩により人間生活が大きく向上していった過程を語る証であり、証拠である。世の中は今や高度情報化社会で飛躍的な技術革新のうねりが生じている。しかし、世の中が便利になったから、それが即人間の幸福につながったかといえ、必ずしもそうとはいえない現実が多々見られる。要は詰まるどころ機械や道具に対する人間の使い方ではないだろうか。

生活のすべてをパソコンやコンピュータに頼り切ってしまうと人間はいつか大きな落とし穴に落ちるのではないかと、アナログ人間である自分はいっさい考えてしまう。機械や道具は人間が使うものであり、人間がそれに使われるのは本末転倒である。

民具を通じて現在の人間生活を顧みること、また、民具を学校教育にも活かして実物教材に触れさせることは、このような技術革新の時代であるからこそ、特に重要であると考えられる。

普段は気づかないが、キャンプや野外学習を行うと電気やガスにない生活に不便さを感じることもある。私たちは便利な世の中に慣らされすぎている。いつか大きなしっぺがえしが来るのではないかと危惧する。この際に、民具を手に取り、先人の知恵とその歴史の変遷過程を体感してみることは、これからの未来を志向する上でも有意義なことと考える。



農作業用などの民具がずらりと並んだ教室
(土佐清水市の中浜小学校)

教材に民具活用を

土佐清水市 保管品を貸し出し

【清水】土佐清水市 ほとんども移動させた。は休校中の中浜小学校 番外礼所真念庵にあ (同市中浜) に保管。った金剛つえなども含 展示している民具の貸 出。中浜小に現在保管 している資料は約20 外の上に学校や団体が 点。木製品はシロアリ 対象。市は「資料が持 つかないかをチェ ックし、今年11月から つ文化財としての重み がある。手触りや色合 いなど五感を通して吸 収できる教材」と話し ている。

市内で集めたり、寄 せられたりした民具は 解説文付きで展示。も 旧松尾小(廃校)に保 管していた。2、3年 前から校舎の木造部分 にシロアリが侵食した ため、昨秋から少しづ つ中浜小へ、引越して 使った柳行李やラン プ、炭を入れて使うア ン。

【囃多】囃多地域の 写真愛好家らでつくる 写真団「四万十」のクラ ブ写真展「囃多の生活」 が9日、四万十市右山 センター「アピアさつ 放つ男 5月町のショッピング センター」で始まった。 地域の町 辺の町 の営みを活写した作品 の暮らし 約70点が訪れる人を乗 せ、15日ま ルムカ

【香良】南国市内6カ所 の観光施設などを巡るスタ ンプラリー「長宗我部元親 ラリー」が、11日に始ま る。今回で10周年となり、 県立理蔵文化財センター (篠原)では歴代ホスター 展も同時開催する。来年1 月31日まで。

南国市観光協会と長宗我 部フェス実行委員会の主 催。参加者は同市山歴史公 園。

【山崎彩加】

元親ラリー

【香良】南国市内6カ所 の観光施設などを巡るスタ ンプラリー「長宗我部元親 ラリー」が、11日に始ま る。今回で10周年となり、 県立理蔵文化財センター (篠原)では歴代ホスター 展も同時開催する。来年1 月31日まで。

南国市観光協会と長宗我 部フェス実行委員会の主 催。参加者は同市山歴史公 園。

幅多の営み活写

【囃多】囃多地域の 写真愛好家らでつくる 写真団「四万十」のクラ ブ写真展「囃多の生活」 が9日、四万十市右山 センター「アピアさつ 放つ男 5月町のショッピング センター」で始まった。 地域の町 辺の町 の営みを活写した作品 の暮らし 約70点が訪れる人を乗 せ、15日ま ルムカ

高知新聞朝刊 25 面記事

(令和2年12月10日木曜日)より引用掲載。

「市史執筆のブレイクタイム(15)」

中浜万次郎の鳥島遭難

市史編集委員長 田村 公利

(1)足摺沖での遭難

この節では、宇佐浦船籍(所有者・徳右衛門)に乗船した万次郎ら5人がどのような経緯で鳥島に漂着し、ジョンハウランド号に救助されたかを『漂異紀畧(大津本)巻之一』をもとに考察していきたい。

万次郎らが乗船したカツオ船は、天保12年(1841)正月5日、宇佐浦西浜を出帆した。乗船者は、筆之丞(後に伝蔵と改名・37歳)・重助(24歳)・五右衛門(15歳)・寅右衛門(25歳)と万次郎(14歳)の5人である。5日の夜は、与津浦(興津浦)の西掛に繫留し一泊した。6日は昼間、佐賀浦から沖合15~16里ほど沖合の縄場洋漁場で操業した。ここで小型の魚を十数匹釣り上げ、その晩は井ノ岬近くの白浜に繫留し、夜を明かした。

7日早朝から西風に逆らいながら、窪津沖を横切り、足摺岬沖の「シ」漁場に向かって船を進めた。一緒に出帆した同郷宇佐浦の他のカツオ船数十艘もその「シ」へ急いで向かっていた。万次郎らのカツオ船は出漁経験の浅い少年・五右衛門が片方の櫓を漕いでおり、経験の長い船乗りの多い他のカツオ船に大きく遅れをとり、やっとのことで「シ」漁場の端に到着することができた。ここで午前10時頃(7日)まで延縄でサバをたくさん釣り上げた。途中、天候悪化で強風が吹き、嵐を予感させた。他のカツオ船は皆、用心深く、急いで足摺岬の北側に位置する布崎目指して避難した。万次郎らの船も同様に避難を開始したが、正午頃になり、風が止み、波のうねりも風いできたので再び延縄漁を行った。

その後、突如として乾吹風(西北風)が激しく吹き、辺り一帯は恐ろしい時化になってきた。急いで延縄を上げ、命からがら、布崎を目指して漕ぎ出した。汐が白く煙り立ち、一寸先も見えなくなり、西風と東風が双方吹き、今にも船が転覆しそうになった。その騒動で櫓は海に流され、何もすることがで

きなくなった。力尽きて皆、茫然としていたが、船頭の筆之丞だけは、帆柱の添木を立て、これに帆の裾を被せて風の力で船が転覆しないようにと試みたが、風の強さはそれを阻止した。皆、寒気で震えながら船にしがみついていたが、船頭の筆之丞だけは、唯一人舵を握っていた。船は意思に反して南東方向へとぐんぐん流されていった。

翌8日には、室戸岬東寺（最御崎寺）が海上から見える海域まで流された。この海域は、捕鯨盛んでクジラ場（藩の捕鯨専用の漁業区域）が設定されており、遠見（クジラを発見するために高台で監視する人）が遭難に気づき、救助に来てくれるかもしれないと期待したが運悪く今日は遠見もない。櫓もないので室戸岬周辺の陸に接岸させることは不可能である。やがて紀伊半島の山並みが見え出した。一同は、ただ風と波にその進行を任せるしかなく、ただひたすらに神仏の加護を願うだけであった。

9日、北西の風が止まず、10日夜明けから風が北東に変わり雨も加わった。敷いていた藁や板切れを割って船上で火を起こして粥を炊き、釣った魚と一緒に食べた。しばらくすると雨はみぞれとなり、それを飲んで何とか喉の渴きを凌ぐことができた。そうするとまた西風が変わった。このとき北西から東に流れる早い海流があり、船はこれに乗り南東方向へと流された。その年は、数十年に一度といわれる黒潮の大蛇行が発生していた。この大蛇行に遭わなければ、おそらく房総沖へと流され、太平洋上をベーリング海峡やアメリカ大陸西海岸辺りまで流されて海の藻屑となったに違いない。そういう面で結果的に幸運だったといえる。

(2)南海の孤島・鳥島に上陸

11～12日北西風が止まず、13日昼頃に小島が見えた。食料もことごとく食べ尽くして船員は皆飢渴しており、ついにこの島に上陸し、水を飲んでから潔く海に身を投げ死ぬことを覚悟した。皆、起き上がり、破損が著しい船で島影を目指し進んだが、風と波が交差し、船は度々転覆しそうになった。日暮れとなり、ようやく島の北側にちかづくことができたが、岩礁があたかも林のごとく立ち並び、上陸することができない。折れた櫓を縄に巻きつけ、島の少し平らな地形面を見つけてその近くに錨に代え、それを海中に下ろして停泊し、夜明けを待った。

14日朝、辺りが白み始めた。釣針を海中に投げると、「アカバ」という磯魚が釣れた。皆でこれを食べ、命を絶つ時間になった。錨替わりの折れた櫓を巻きつけた縄を切り離し、船を磯に上げ、寅右衛門・五右衛門・万次郎の3人は、早々と海中に飛び込んだ。筆之丞・重助もこれに続こうとしたが、船が転覆しかけてバランスを崩した。次の瞬間、大波が船体にまともに当たり、一旦船が元に戻った。この隙に筆之丞と重助は、海中に飛び降り、岩根に脱出した。船は微塵と砕け、このとき重助は足を骨折した。その苦痛は耐えがたく、目が暗み、そのまま重助は岩の上に突っ伏した。

寅右衛門・五右衛門・万次郎は、既に島に這い上がり、筆之丞と重助を呼んだ。この声に勇気づけられ、筆之丞と重助の二人もようやく上陸することができた。島は一周一里ばかりの溶岩でできた火山島でグミ・茅・茨が茂り、丈の短い木々が点在していた。イタドリが生えてはいるが、岩場の高い所にあり採取する方法がない。島の南西方向には、アホウドリが繁殖しており、巣を作り、子育てをしていた。そこにいるアホウドリは、ざっと2,000羽余りである。岩場の一つに洞窟があり、ここで夜露を凌ぎ、鳥を食料として一日でも長く命をつなごうということとなった。島に打ち上げられた船板を拾い寝床に敷いた。釣針の先で鳥の皮を剥ぎ、小石で肉を切り、太陽熱の籠る岩に肉を敷き、蒸し焼にして鳥肉を食べた。島には仕方なく100日ほど滞在していたが、降雨がなく、雨が降った日は僅か30日余りであり、岩間などにも湧き出る水は一滴もなかった。ついには尿を飲むこともあった。筆之丞と万次郎が水を求めて島を探索していると、島の火山の頂上付近に古井戸が掘られていた。そこに少し濁水が溜まっており、近くに墓碑らしき石造物が2基あった。解説することは困難であったがその墓碑には銘文も刻まれていた。筆之丞は、昔ここに流された人が自分たち以外にもおり、仕方なくここに住み救助を待っていた。しかし、その願いも空しくここで死去したものであろうと推測し、そのことを万次郎に話した。これは他人ごとではなく、自分たちの未来を暗示しているのではないか。墓碑に懇ろに念

仏を唱えてから険しい岩場を下り降りた。このことを洞窟で待つ他の 3 人に話すと、自分たちも同じようにここで死ぬのではないかと恐れ怯えて彼らは泣いた。

4 月下旬、地震が発生した。夜半になり揺れがますます強くなり、洞窟では、天井より小石がバラバラと落ちた。朝になり地震も止み、洞窟の入口を見ると、巨大な石がすぐそこに落ちていた。これに万次郎ら 5 名は肝を潰し、何も自分たちに被害がでなかったことに天運の強さを喜び合った。これは天が自分たちを哀れみ、遠くない未来に必ず吉祥があるに違いないことを予見させた。そこで 5 人は、毎日神仏に願をかけて祈念し、救助を待った。

6 月初め、五右衛門はなかなか寝つかれず、明け方から外に出て海上を見ていた。南東方向に船を発見した。急いで他の四人を起し、船の方に近づいて見ると、そこに異国船の船体がかすかに見えた。ついに吉祥が到来したと狂喜した。寅右衛門が目がよいことに皆、感心した。しかし、この船が北西に向かって行き過ぎると、寅右衛門は力を落とし、泣く泣く洞窟に戻って突っ伏して嘆いた。飲水もなく、アホウドリも巢立ち、もはや生き抜くことは不可能である。魚は多いが、鳥の皮を剥ぐ時に釣り針を度々使用し、既にそれを紛失している。他に何一つ漁具もない。唯一生き残された方法は、海苔を採取し、貝を拾い、ようやく飢えを凌ぐだけになった。5 人の落胆は大きかった。

万次郎が磯に貝を拾いに行った時に、救助に来るボート 2 艘を発見した。五右衛門は帆桁の折れた棒きれに服を巻き付けてこれを振った。ボートの船員は帽子を振りこれに応えた。ボートには縮れ髪の 6 名の黒人が乗っていた。

最初この鳥島に来たのは、救助に来たのではなく、周辺に魚が多いので、これを食料として獲るために島に近づき、偶然に目印を振っているのを発見したとのことであった。洞窟にいた他の 2 人も救助され、ジョンハウランド号に乗船した。

(3)まとめ

以上の経緯により、ホイットフィールド船長の指揮するジョンハウランド号に万次郎ら五人は幸運にも救助された。ジョンハウランド号は米国捕鯨船であり、当時小笠原諸島など日本近海において米国捕鯨船によって盛んに捕鯨がなされており、日米和親条約（安政元年・1854）もこれらの船に燃料や水・食料を補給することを条件としていた。これらの鯨油は、石炭・石油にエネルギーが転換されるまでの間、船舶や機関車の蒸気機関の燃料として高値で取引された。

天保 12 年（1841）11 月 20 日、ジョンハウランド号はハワイ島ホノルルに寄港した。ここで遭難した 5 人は手厚い保護を受けた。他の 4 人がハワイに残り、帰国のチャンスの時期を覗うのに対して万次郎は、ホイットフィールド船長の勧めもあり、米国大陸・フェアヘーブンに行くことを選択した。

その後、重助はハワイの地に眠り、寅右衛門は伴侶と子に囲まれてハワイで生きる道を選ぶ。嘉永 4 年（1851）、万次郎・筆之丞（伝蔵）・五右衛門は琉球摩文仁小渡浜に着岸して土佐に帰国する。遭難から実に 10 年余りの歳月が経っていた。

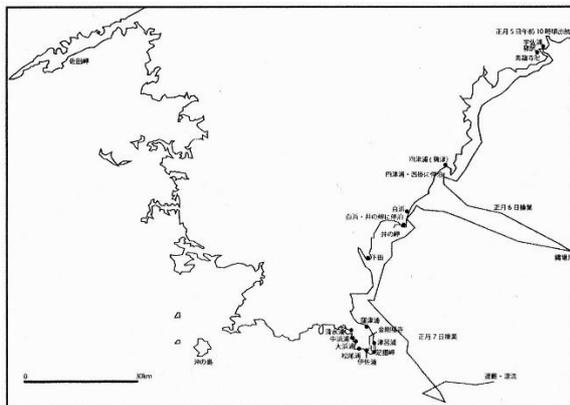


図 1 宇佐浦から足摺岬沖で遭難までの推定経路

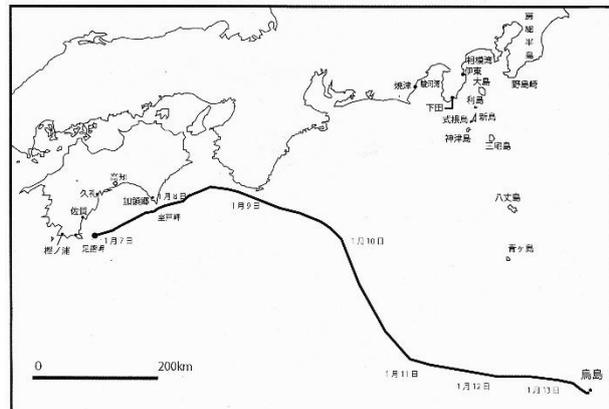


図 2 足摺岬沖から鳥島までの遭難の推定経路



黒潮町白浜付近から見た興津崎



窪津付近から見た興津崎

【引用・参考文献】

高知県立坂本龍馬記念館『漂異紀畧（大津本）』高知県立坂本龍馬記念館、2013年。

中濱 博『中濱万次郎―「アメリカ」を初めて伝えた日本人―』富山房インターナショナル、2010年。

市史編さん・編集合同委員を

明年2月5日(金)14時～ 開催予定！

年度末の会議は、「市史編さん・編集合同委員会」として2月5日(金)14時から16時まで、市役所3階・議会会議室にて開催する予定です。市史編さん委員と市史編集委員・事務局・委託業者が集まり、本年度の市史編さん事業の総括と課題を協議し、来年度への更なるステップにつなげていきたいと考えております。

万障お繰り合わせのうえ、出席をよろしくお願いいたします。

年内に一度一次原稿提出を！市史編集委員各位へ

各編集委員の皆さんにおかれましては、職務に、活動にとお忙しいことと存じます。また、執筆もコツコツと取り組んでおられることと存じます。さて、「市史編さん便り15号」及び本年度第2回市史編集委員会で確認した通り、一次原稿がまだ未提出の執筆委員さんは、**今月中に執筆の一次原稿を一旦提出**いただきたいと思います。

「第11章防災史」「第12章民俗伝説」「第13章地勢・地形地質」（「地形地質」部分）「第14章植物」について提出をよろしく願います。提出については10頁程度でかまいません。提出が無理なようでしたらその旨を市史編さん室までご連絡ください。

本年はお世話になりました！来年も宜しくお願いします。

末筆になりましたが、本年一年市史編集・執筆にご尽力いただきましてありがとうございます。コロナ禍の真ただ中ではありますが、郷土の歴史を書くという尊い役割を担い私たちは令和4年度末を期限に前へ前へと進んでいます。いろいろな困難の波も予想されます。どんな波が押し寄せようと、私たち市史編集委員会は一致団結し、希望を胸に、明年もベストを尽くして取り組んでいきたいと思います！